

思

考

の

隅

景

めとする上流階級の、通称
プラーミンたちに、紅茶
black tea に替わって日本の
緑茶を高級品として売り込
む宣伝係を演じていたこと
になる。緑茶 green teaとい
っても当時北米で大量に消
費されていたのは煎茶であ
り、当時日本でも流行を見
せていた。たしかに岡倉も
北米で抹茶の濃茶 whipped
tea を煮ている。とはいえ彼
の推奨したチャ・ノ・ユの実
態も、煎茶 steeped tea が中心
であったようだ。保存困難
な抹茶 powder tea が岡倉の
『茶の本』に述べる茶の本流
だと思ひ込むのは、勘ちが
い。それは大正年間以降の、
財閥を中心とする新興階級
による茶の湯再興から過去
を振り返って、今日の我々
が犯しがちな逆遠近法の錯
覚だったはずである。

では岡倉の『茶の本』は
「平和のための兵器」 peace-
ful warfare として成功を収
めたのか。輸出振興策とし
ては、功を奏したとは言
い難い。インド・セイロン原
産の紅茶輸出が文字通り倍
増を重ねるのに押されて、
輸出商品として緑茶が北米
市場で占める割合は、1910
年代以降著しく低下してゆ
く。だが文化大使として、
茶道は世界各地に散種され
ていった。岡倉の *The Book
of Tea* は英語文獻の古典と
なり、世界各地の言語に翻
訳され、今も刊行が続いて
いる。元來は労働者階級の
安価な飲料だった輸出用緑
茶は、この世紀の間にいつ
しか高級な文化伝達媒体
へと変質した。はたしてそ
れは岡倉の意図だったの
か。それとも意図せざる逸
脱だったのか。

※国際日本文化研究センタ
ー開催の国際研究集会「万
国博覧会と人間の歴史」(研
究代表者：佐野真由子、20
15年12月17・20日)での
Robert Hellyer「戦うティ
ールム：万博を舞台に、
アメリカ市場を狙って繰り
広げられた日英戦争1893・
1917」への筆者の即興のコ
メントに基づく。佐野編・
同題名の論文集は思文閣出
版より刊行。

連載

紅茶と緑茶の争いのさなかに

岡倉天心『茶の本』再考・蛇足

稲賀繁美

国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学教授

イサベラ・スチュワート
・ガードナーのバーナード
・ベレンソン宛ての書簡に
は、ボストンのガードナー
邸で岡倉寛三(1863・1913)
が催した「チャ・ノ・ユ」の
夕べに体験した感激が綴ら
れている。『茶の本』の出版
は1906年だが、それに先立
つ1904年のセント・ルイス博
覧会のおりに岡倉は、欠席
したルーヴル美術館館長に
替わって講演をこなしてい
る。この博覧会では大谷嘉
兵衛(1845・1933)が当時、
生糸と並んで日本の重要な
輸出品だった茶を扱ってい
る。とすれば『茶の本』も、
日本の輸出振興策の一環と
して刊行された英文著作だ
ったのではあるまいか。

あまり知られていない事
実だが、19世紀後半の北米
では緑茶の消費が紅茶のそ
れをはるかに上回っていた。
これに対して大英帝国は、
まだ茶の生産地としては未
熟だったセイロンやダー
ジリンを高級な紅茶とし
て、北米大陸に売り込む大
攻勢をかけ始める。日本茶
には苦力の汗が混入してい
て不清潔などの、露骨な人
種差別的キャンペーンが、
当時の新聞広告に掲載さ
れている。背景には1848
年以來のゴールドラッシュ
でとりわけカリフォルニア
などに中国系移民が大量に
流入していたという事情も
あったろう。世紀末の中国
人排斥に続いて、大地震に
続く1907年には、日米の「紳
士協定」に基づき、事実上
の日本移民排斥法が制定さ
れ、多くの日系移民が巻き
込まれる。それは大陸横断
鉄道により太平洋岸から中
西部や東海岸に商品を大量
輸送できる動脈の成立とも
裏腹の事態だった。ブラジ
ルへの公式移民第1号とな
った笠戸丸のサントス入港
は1908年のこと。北米から
南米へと、日本からの移民
の目的地はこれ以降、大き
く変更された。そしてそれ
ら日系移民の多くが、サン
パウロの後背地に入植し、
原野を開拓して、茶ならぬ
コーヒー栽培に従事するこ
ととなる。

岡倉はボストン茶会事件
によって北米独立のきっか
けとなったボストンにおい
て、ガードナー夫人をはじめ